

12

オットー・モーニッケが見た幕末期の日本の医療

相川 忠臣

日本赤十字社長崎原爆病院

オットー G.J. モーニッケの日本医療概説 *Aanteekeningen over de geneeskunde der Japanezen* (*Geneeskundig Tijdschrift voor Nederlandsch-Indie* 1852) はオランダ医学週刊誌に紹介され、高評を得た。内容：1章は日本の医療の歴史。2章は日本の医療の分類、皆無の衛生行政。3章は日本の自然科学と各科別の医学、薬剤である。国際医療人の鋭い眼で幕末期の日本の医療を概観した貴重な資料である。

1章. 漢字伝来, 仏教伝来, 中国医学, ポルトガルとオランダ医学について叙述, 読まれている70の蘭書を列挙。幕府は漢方のみを公的に認め, 蘭医学を認めていない。しかし各藩の開明的な藩主が蘭医学を学ばせ, 実施させている。最後にフォン・シーボルトに言及, 彼の医学と自然科学に果たした役割は大きく, 関西や江戸で活躍する著明な医師や医学教育者に彼の弟子が多い。しかし長崎では彼の起こした事件は四半世紀後も昨日の事のように記憶されている。

2章. 日本の医業を分類し, 医師, 内科, 外科, 鍼科, 眼医者, 口中医者, 産医者, 骨接ぎ, 産婆, 按摩を列挙。しかし薬材を扱う薬屋はあるが, ヨーロッパの様な薬剤師と薬局が存在しない。

幕府は西欧の国が統治していないアジアの国々に比べ精密で賢明な, 理解しやすい施策を行っている。しかしレプラ, 梅毒, 天然痘と疥癬の4つの伝染病の対策はなく公衆衛生施策は全く欠如している。レプラは西欧では隔離されるけれども, 初期段階は野放しで, 変形の著しい終末期でも自宅内の部屋に隔離する程度。レプラの乞食が, 掘った穴に蓆で覆って住み悲惨な生活をしている。売春は公認されている。全国にある遊郭に関所があり, 犯罪者の摘発に遊女が協力し犯罪の取り締まりは厳しい。しかし梅毒の予防施策はない。幕府は牛痘の普及を秘密裡に応援したが, 種痘を施策として実行しなかった。日本全国の多くの大名が, 藩内の全ての子に種痘の接種を命じ, 種痘担当の医師を任命して普及した。

3章. 内科学: 出島到着の翌日に会った医師(おそらく出島の医師の植林宗建, 情報源か)が蘭医学の高度な内科的知識を有しているのに驚嘆している。その医師は心疾患への聴診器の使用や, 梅毒治療上のヨードカリウム剤と水銀剤の薬理的相違など高度な質問をするだけでなく, 監視人にわからないように専門用語を駆使して様々な話題に対応したのである。シェーンライン, カンスタットやフーフランドの内科書を読み, 内科学について西欧のやぶ医者より知識がある蘭方医がいるが, こと患者への応用となると診断学の知識がなく, 症状にこだわり, 主となる病気の判断がつかない。基礎医学の解剖学, 生理学, 病理学総論を学んでいないので, ある臓器の疾患と判断できない。外科学: 外科のレベルが低いのは日本に長期間戦争がないからであろう。軍陣医学がない。上・下肢の切断術については指や前腕のレベルまでで, 大腿骨頸部離断, 大腿骨や上腕骨の骨頭を外しての離断術はほとんどなされていない, 碎石術, ヘルニア手術もなされていない。膿瘍の切開をしない。リンネルの包帯ではなく和紙を用いる。外科器具は精巧で, ランセットはヨーロッパの一流品と変わらない。眼科学: 白内障手術は針による墜下法である。産科学: 京都の水原(義博)先生から新著『産育全書』(1850)を送っていただいた。多くの挿図を見て, 日本の産科学は優れていると驚いている。鉄ではなくクジラのひげを産科器具に用いる。帝王切開は行われていない。義歯が素晴らしいとある。最後に薬剤を詳述。